

# 上級学習者の口頭伝達能力に関する一考察 ストーリーテリングにおける日本語母語話者との比較

村上 知栄子 塩見 式子

## 1. はじめに

自らが体験したことや、伝え聞いたことをわかりやすく話し興味を持って聞いてもらう技術はコミュニケーションをとる上で非常に重要である。日本語能力試験 1 級に合格している上級学習者は、すでに高度な文法や語彙・表現力を身につけているはずであるが、口頭表現においては、既習の知識が十分発揮されず基本的な情報は伝えられるものの日本語母語話者に比べると不自然でぎこちなさが残る。上級レベルを指導する教師はこれまで指導してきたどの項目がまだ十分習得されていないのか、さらに上級学習者が高度な口頭伝達能力を得るためにはどのような指導を行うべきであるのかを知る必要がある。本研究ではストーリーテリングを上級学習者と日本語母語話者に課し、語彙・表現と接続表現そして視点・焦点の置き方の 3 点を中心に双方の発話を分析することによって、上級学習者の口頭伝達能力に関わる問題点を明らかにする。

## 2. 先行研究

### 2.1. 口頭伝達能力

口頭伝達能力には二種類ある。一つは一方的に話し手が話をするときに必要となるもので、たとえば講義、スピーチ、講演などの場面である。そこで働く機能は「説明する」「意見を述べる」などがある。もう一方は相手に向かって話し、相手も聞き返したり、反対に立場を変えて話し

手となったりするとき使う能力である。後者は自然な日常生活での場面で求められる能力で相手によって伝わり方が異なり、話しながら方向性を変えるなどの即応性が求められる。この場面では、たとえ伝達が不十分であっても、あるいは完全でなくても相手は聞き返しができるので、相手の理解を確認しながら訂正することもある。または相手が伝達内容の不完全さを「繰り返し」や「言い換え」を使って補うこともできる。たとえば、一般の日本語母語話者より日本語教師の方が、日頃から日本語学習者の発話を聞き慣れているので、学習者の話す日本語の内容が推測でき、うまく話し手から意図を聞き出す技術も持っている。不完全な話の内容でも、相手によっては容易に理解される場合があるのは、聞き手もコミュニケーションの成立に協力しているからだと言える。コミュニケーションに関わる双方の力で、コミュニケーションを成立させるのである。

実際のコミュニケーションの場面では、複数の話者が関わりお互いに協力して話を進めていくが、学習者自身の口頭伝達能力を高めるには相手に依存するのではなく、話し手が一人でも伝えられる能力を持つようにしなければならない。話し手は発話する前にメッセージの内容を計画し、意味を伝達する語彙や表現を見つけ、それを適切な文法に照らして記号化し、音声化していく。記号化する際に必要な語彙・文法に関する知識や社会言語学的知識は初級から段階的に指導されており、上級学習者であればすでに身につけているはずである。従って、意味的な一貫性を発話に加えることが上級学習者にとってより大きな課題であり、それが伝達能力に影響を与えているのではないかと考えられる。

ボウグランド、ドレスラー（1984）によると、談話は相互に関連しあうテキストの集合であり、テキストが談話を構成している。テキストはコミュニケーションのために7つの基準を満たさなければならない。7つの基準とは「結束構造」「結束性」「意図性」「容認性」「情報性」「場面

性」「テキスト間相互関連性」であるとしている。「結束構造」は文法的依存に基づいて成り立ち、「結束性」は、テキスト使用者の間での認知的過程を通して生じるもので「結束構造」と「結束性」はテキストの中心の概念である。さらにテキスト使用者の態度もテキスト性を判定する基準となる。使用者中心の概念として「意図性（話し手側の意図を満たす手段としての機能）」「容認性（聞き手にとって有用性、関連性のあるテキストを期待している態度）」「情報性（提示される情報がどの程度新しいことか、あるいはどの程度予期しないことであるか）」「場面性（テキストが用いられている場面に適切かどうか）」「テキスト間相互関連性（同じ談話の中で自分のテキストを他の人のテキストに関連させるようにすること）」があると述べられている。談話にテキスト性を持たせるには、7つの基準が図1のように関係し合っているとと言える。先行研究では談話の展開において「結束性」に関する言及はあるが、「情報性」「意図性」まで検討されていない。日本語母語話者や上級学習者の発話の中にこれらの要素が現われ、かつ有効に使用されているかどうか明らかにする必要がある。本研究では「結束性」「情報性」「意図性」に関わる「語彙・表現」「接続表現」「視点」の3つの観点から考察を試みる。

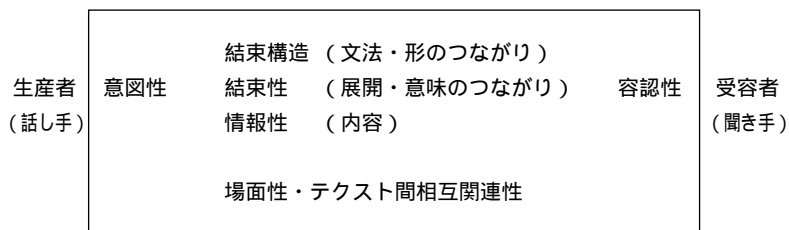


図1 テキスト性の基準

## 2.2. 語彙・表現

庄司(2001)は6コマの絵をもとに中上級学習者と日本語母語話者に

ストーリーを話させ、それを主に語彙選択の観点から比較した。その結果、学習者の語彙選択は日本語母語話者のそれに照らして決定的な誤りが見出されたほか、日本語母語話者の発話文では必ず選択されている語が日本語学習者の発話の中には全く、またはまれにしか見出されなかったと報告している。本研究の調査協力者はすべて日本語能力試験 1 級の合格者で、庄司の調査協力者より若干レベルが高い。また、使用する絵も異なる。今回はこのような異なる状況下でどのような結果が得られるのか観察したい。

### 2.3. 接続表現

接続表現といえば、まず接続詞、接続助詞が指摘されるが、テキストの「結束性」を維持する方法はこれら以外にも様々ある。森田（1987）は「文の接続は各文同士の意味の相互関係の上に成り立っていると言える。そして、それを形式の上に定着させる方法として、さまざまな指標が文中に隠されている」とし、次の 1～9 を指標となる語句として挙げている。

1. 対義の語によって受け継がれる文の接続
2. 類義の語や同類の主語によって受け継がれる文の接続
3. 上・下位語によって受け継がれる文の接続
4. 同一語の反復によって受け継がれる文の接続
5. 言い換えによって受け継がれる文の接続
6. 文脈指示語で先行語句ないしは叙述を受け継ぐ文の接続
7. 応答詞によって先行文を受け継ぐ文の接続
8. 副詞によって受け継がれる文の接続
9. 接続詞によって受け継がれる文の接続

渡邊（1996）、増田（2000）、庄司（2001）は中上級日本語学習者を対象にストーリーテリングに関する研究を行い、その中で日本語母語話者と中上級学習者の接続表現について分析を行っている。渡邊は日本語の談話展開スタイルを「視点」と文の接続から求めた。文の接続の考察は接続詞、副詞、接続助詞、連用中止法、指示詞、同語の反復のほか森田（1987）が述べているような意味的な関連も加えた立場で行っているが、同語の反復や対義語、類義語、言い換えなどで受け継がれる文の接続などについては十分検討されているとは言いがたい。増田は書かれたストーリーテリング文を分析し、「既知情報の補足方法としての再出」などの技術が結束性を高める要素の一つであることは指摘しているが、考察の際同語の反復や指示表現は対象に入れていない。庄司もまた結束性について考察を行い、学習者が文の結束を接続詞に頼るか、さもなければ結束に留意しない傾向があることを指摘している。しかし、やはり同語の反復や対義語、類義語、言い換えなどで受け継がれる文の接続については触れていない。そこで、本研究では先行研究で考察の対象とされてきた接続詞、接続助詞、副詞、指示表現に加え、森田が挙げた1～9の指標のうちの1～5、つまり先行語の同語や関連語句の使用も考察の対象に加えたい。

#### 2.4. 視点

テキストの「結束性」を保つために2.3で述べた接続表現とともに視点の維持の重要性について、いくつかの先行研究がなされている。田代（1995）は中上級日本語学習者に漫画の説明文を書かせ、そのデータを分析・考察した。日本語母語話者も学習者も書かれた情報量には差がほとんど見られないが、視点の置き方が異なることを明らかにした。視点を「視座（どこから現象を見るか）」と「注視点（どこ・何を見るか）」<sup>1)</sup>を基準にして分けて分析した結果、「注視点」においては日本語母語話者も

学習者も見る対象が一箇所に固定せず、移動していくことがわかった。一方「視座」に関しては、日本語母語話者は主人公となる人物から現象をとらえているが、学習者は主人公以外の人物から見ていると述べている。この学習者の「視座」のとらえ方が不自然さにつながると結論づけている。庄司（2001）は結束性を高めるために、日本語母語話者は視点を登場人物一人に固定していることを明らかにした。中井（2005）は自らの授業実践を通して、ストーリーテリングにおける話し手の談話能力向上のための指導項目を提案した。指導項目の中の一つに「登場人物の区別／焦点の付け方」を加えた。さらにその下位項目として「主語・視点の維持／焦点化（受身・使役・使役受身・授受表現の使用）」を挙げている。このように談話の展開について「視点」の役割の大きさを指摘している研究が多い。

渡邊（1996）も「視座」「注視点」に着目し、さらに詳細な分析を試みた。談話展開のスタイルを3つに類型化し<sup>2)</sup>分析した結果、日本語母語話者は「ある人物寄りの視点」が半数近くあったが、中国語話者は「中立視点」が圧倒的に多く見られたと報告している。ただし、日本語母語話者の「中立視点」の中に受身や授受補助動詞が使用されたものも含め、それを「ある人物寄りの視点」の複合体として説明しているのは問題がある。この場合は視点の維持が出来ていると考える方が妥当ではないだろうか。本研究では渡邊（1996）が類型化した3つのスタイル以外に他の談話展開がないのか検討し、日本語母語話者と上級学習者の談話の共通点・相違点を明らかにしたい。

### 3. 調査

#### 3.1. 目的

ストーリーテリングを通して、上級学習者がより自然な日本語母語話

者に近い口頭伝達能力を身につけるには、どのような能力が必要なのか検証する。テキストの「情報性」「結束性」「意図性」を担う語彙・表現、接続表現、視点などを比較の項目とする。

### 3.2 対象

上級学習者は立命館大学に在籍する留学生13名で、男性4名、女性9名、出身は中国12名、台湾1名である。全員日本語能力試験1級に合格している。日本語母語話者は京都に在住する18歳から23歳の大学生35名で、内訳は男性13名、女性22名である。

### 3.3. 時期

調査は日本語母語話者、上級学習者ともに2005年7月末から8月初めにかけて実施した。

### 3.4 方法

各調査協力者にセリフのない4コマ漫画<sup>3)</sup>を見せ、ストーリーを作ってもらった。その漫画は聞き手には見えない設定とし、協力者に音声だけで伝えなければならない旨を説明した。話を始める前に一分間考える時間を設けたが、一分経つ前に話し始めることもあった。発話は録音し、後に文字化した。

## 4 . 結果

### 4.1 中級での学習・上級までに習得すべき項目

上級と言われるレベルの学習者においても、語彙・表現、文法、文体の各分野で誤用は少ないながら観察される。本節では今回の調査で見られた上級学習者の誤用等問題点をいくつか取り上げる。

1) 語彙・表現

a 自動詞・他動詞・可能動詞の混同

(1) お父さんは、えと、きかずに、マイペースで、えっとずっと飲み  
つづいていきました。(F6)<sup>4)</sup>

(2) 「ベルトもしまんないじゃない。」(J16)

(3) ベルトもしめられ、しめられなくなってきた。(F4)

このレベルではまだ(1)と(3)のような自動詞、他動詞、可能動詞を混同する例が目立つ。(1)は「飲み続けていく」と他動詞「続ける」が使用されるべきところにもかかわらず、自動詞「続く」が使用されている。また、(2)と(3)を比較すると明らかなように、日本語母語話者が自動詞の否定形を使用するところで、上級学習者は可能動詞の否定形を使っており、不自然である。

b 文脈に合った語や表現の選択

(4) 食事のほうめん、ところでは、ぜんぜん、何のせいやくもしてなくて、してなかったんです(F7)

(4)で上級学習者は本来「制限」と言うべきところを「せいやく」と言っている。また、これ以外にも「腹が出てくる/出ている」の意味で「腹がだんだん膨らんでくる」「お腹がまるくなる」などの表現を使用している例もある。いくつかの類義語の中からその文脈に合った語や表現を選択することは日本語能力試験1級合格レベルであっても容易ではないことがうかがえる。



## 2) 文法

- (5) 最近だんだん太った田中さん、は、奥さんにすすまれて、すすめられて、あの、毎朝、運動するようになりました。(F11)
- (6) 奥さん、ころを見て、け、う、これを見て、すっごくおどろきました。注意させて「やめてください」といいましたけど、(F2)
- (7) お母さんは、怒ってやめなさいって言われたけど、お父さんは、えと、きかずに、マイペースで、えっとずっと飲みつづいていきました。(F6)
- (8) ビールを飲もうと、したとき、妻がだめだめと言われてけど、結局三本も飲んでしまいました。(F4)

今回の上級学習者の発話資料には受身、使役の誤用が多く見られた。しかし、活用上の誤用はほとんどなく、たとえ間違えて発話したとしても、(5)のようにその場ですぐ修正を行うことができた<sup>5)</sup>。この段階の学習者にもっともよく見られる文法上の誤用は(6)(7)(8)のような受身、使役の用法上の誤用である。(7)(8)は受身形「言われた」を「言った」にするか、受身形をそのままにして助詞「は」または「が」を「に」にするかしなければ、日本語として意味が通らない。上級学習者ではこのような受身と関わる助詞の誤用が他の助詞の誤用より多い。

受身、使役、またそれらに関わる助詞の他に、「微笑みをする」「小太く見える」など語の品詞を誤って認識している例もあった。

## 3) 文体

今回収集した発話で、せりふ部分を除き、「～ですがノ～だけど」を含んだ文末を調査してみると、日本語母語話者では35名中34名が文体を統一していたのに対し、上級学習者では13名中4名しか文体を統一してい

なかった。また、日本語母語話者で文体を統一していた34名中30名と、上級学習者で文体を統一していた4名全員は「ですます体」で統一していた。文体統一をしていない学習者の文末を見てみると、「ですます体」で終わっている文末の数が優勢であった。日本語教育では一般的に「普通体」「ですます体」は初級で導入され、中級になり普通体で作文を書くようになると、文体の統一についても指導されるようになる。今回のこのような結果は文体統一に関する上級学習者の意識の低さが原因であると思われる。

以上のように、これまで指導はされてきているものの、上級学習者の発話には語彙・表現、文法、文体の各分野で問題点が見られる。今後はこれらの問題が解決するよう指導方法を工夫していく必要がある。

## 4.2 日本語母語話者と上級学習者との比較

4.1では上級学習者の発話に見られる様々な問題点について述べた。このような問題が全て解決できれば、上級学習者の発話は非常に聞きやすくなり、彼らの目指す日本人大学生のレベルに近づくことは間違いない。しかし、それらを解決したとしても未だ今回の調査で収集した日本語母語話者の発話と上級学習者の発話には差が見られる。ここでは語彙・表現、接続表現、視点の3つの観点から、日本語母語話者と上級学習者の違いを見ていきたい。

### 4.2.1 語彙・表現

どのような語や表現を選択するかという問題はテキストの「情報性」に大きく関わると考えられる。庄司(2001)は母語話者10名中8名以上が使用した語を必須語、5名以上使用した語を重要語とし、中上級学習者での使用率を調査した。その結果、「借りる」「並ぶ」「割り込む」などの語は日本語母語話者の発話では必須語や重要語であったが、学習者で

これらの語を使用しているものは極めて少なかった。庄司はこれらの語が使用できない学習者は「借りる」の代わりに「もらう」、「並ぶ」の代わりに「立つ」「待つ」、「割り込む」の代わりに「来る」「立つ」「走る」などの他の語で代替し、表現が迂遠になっていると報告している。それでは、本研究の対象である上級学習者と日本語母語話者にも同様の差が見られるであろうか。

今回の調査の結果では、日本語母語話者の大多数が使用しているにもかかわらず、上級学習者がほとんど使用していない語は見出せなかった。しかしながら、ストーリーの面白さ、表現の豊かさ、言い換えれば、テキストの「情報性」の強化という点から見ると、やはり日本語母語話者のほうが上級学習者を上回っている場合が多い。その理由の一つとしては、日本語母語話者の語彙・表現におけるバリエーションの豊さが考えられる。ここでは、日本語母語話者の語彙選択がどのような点で上級学習者と異なっているかを具体的に見ていく。

#### 1) オノマトペの使用

上級学習者が使用したオノマトペは「どんどん」(2例)、「だんだん」(4例)、「ガバガバ」(1例)の計7例で、日本語母語話者が使用したオノマトペは「どんどん」(2例)、「ガブガブ」(2例)、「キチキチ」(1例)、「ブクブク」(1例)の計6例であった。これらのオノマトペを『日本語能力試験 出題基準』<sup>6)</sup>で見ると、「だんだん」は4級語彙、「どんどん」は3級語彙、「ガバガバ」、「ガブガブ」、「キチキチ」、「ブクブク」は級外の語彙である。日本語母語話者は級外のオノマトペを使って、動作や状態をより詳しく表わしている。

#### 2) 「太っている」という表現

日本語母語話者及び上級学習者、双方の大半は場面1<sup>7)</sup>を説明する際、

登場人物の男性が太っていることに言及している。上級学習者で一番多く使用されている表現が「太る」(6例)で、その他は「お腹が出る」(4例)、「お腹がまるくなる」(1例)、「腹が膨らむ」(1例)、「太りすぎ」(1例)、「小太い(小太りの誤り)」(1例)、「体重が増える」(1例)となっている。日本語母語話者で一番よく使用されているのは「太る」(15例)で、次が「お腹が出る」(9例)、その他「太りすぎ」(6例)、「太り気味」(4例)、「小太り」(1例)、「お腹が気になる」(1例)、「お腹のお肉が気になる」(1例)、「お肉が付く」(1例)、「肥満」(1例)、「中年太り」(1例)となっている。上級学習者でも日本語母語話者でも、使用率が高いのは「太る」、「お腹が出る」と同じであるが、表現のバリエーションという点から見ると、日本語母語話者と上級学習者の違いは明らかである。また、日本語母語話者が使用している「中年太り」という語はその男性が単に太っているということだけでなく、その男性の年齢まで説明することができる。場面4で日本語母語話者だけが使用している例で「ビール腹」という表現があるが、これも単に腹が出ているというだけでなく、ビールを飲みすぎて腹が出たという理由も説明することができる。日本語母語話者はそれ一語の中に多くの情報が入ったものを適切に選択することができる。

### 3) 男性の飲食理由

場面3は男性が運動後に飲食をするシーンであるが、調査協力者の中にはただ「運動の後、男性はご飯をたくさん食べたり、ビールをたくさん飲んだりした」というだけではなく、なぜ男性が飲食したのかを説明している者がいる。その理由を上級学習者と日本語母語話者がどのように説明しているかを比較してみよう。

まず、上級学習者13名中10名が男性の飲食理由について説明している。

- (9) ジョギングから帰ってきたお父さんは、お母さん用意したおいし  
そうな朝ごはんを見ると、すぐに座って、あ、ごちそうに楽しみ  
始めまし、始めました。(F5)
- (10) しかし、それは、それだけのことで、食事のこ、食事のほうめん、  
ところでは、ぜんぜん、何のせいやくもしてなくて、してなかつ  
たんです。(F7)
- (11) 昼間は家に戻った時に、「あついなあ、ビール出しなさい」てガ  
パガパとビールを飲み始めました。(F13)
- (12) この運動後、お腹が結構すいたから、う、帰るとビールとか、ご  
飯とかたくさん食べました。(F2)
- (13) ジョギングが終わって、疲れて、喉とか渴いて、またビールとか  
飲み始めたんです。(F3)

(9) は、その下線部から「お母さん」の料理が美味しそうだったので、「お父さん」が食べてしまったと解釈できる。(10) は「せいやく」とあるが、これは前述したように「制限」の誤りだと考えられる。そうすると、男性が食事制限をしていなかったという理由を述べていることになる。また、(11) では男性のせりふから男性が「あつい」と感じていたことが分かり、それがビールを飲んだ理由となっている。このように、上級学習者の発話の中には工夫がみられるものもある。しかし、大半は(12)、(13)のように「疲れた」(4例)、「お腹がすいた」(3例)、「喉が渴いた」(2例)を理由としている。

次に日本語母語話者の発話を見てみよう。日本語母語話者35名中21名が男性の飲食理由を説明している。その例には学習者のように単に「疲れた」「喉が渴いた」という表現で理由を説明しているものは少なく、大半は内容的にも、表現的にも工夫されているものが多い。

- (14) 帰ってきて「あー、ビールはうめえなあ」(J2)
- (15) 「あーあ、いい汗かいた。やっぱ、いい汗かいた後のビールはおいしいなあ。」(J15)
- (16) 帰ってくるなり、ビールをガブガブ。「あー、やっぱ、ランニング後はビールだよなあ。」(J16)
- (17) でもジョギングした後のビールがとってもとってもおいしくて、  
いつもより2倍も3倍もビールを飲んでしまって、(J19)
- (18) しかし田中さんはランニングしたあと自分の大好きなビールを何本も飲み、(J34)

(14) から (17) は運動後のビールは美味しいという例である。「ビールはうめえなあ」「やっぱ(やはり)」などの表現から聞き手に男性がビール好きなのではないかと推測させている。(18) は男性がビール好きであることを明言している。

- (19) 走った後は、すごく爽快感でいっぱいで、ビールがすすむんで、いつもよりビールを飲みすぎてしまうということで、(J3)
- (20) で、走ったんですけど・・・その、気の緩みというか、できた安堵感から、家に帰ってからビールをいっぱい飲んで、(J7)
- (21) それでマラソンをしいるってことで安心感を得たらしくて、夜とかも、夜のビールが一本から二本になり、頑張るごとに増えたらしくて、(J26)
- (22) 田中さんはストレスが溜まってしまって、まあ、夜にその分だけビールを飲んで、飲むようになってしまって(J9)

(19) から (22) は男性の運動後の心理を表わした例である。

- (23) ジョギングから帰ってきたら、いっぱい汗をかいてしまったので、  
たくさんビールを飲んでご飯を食べてしまって、(J18)
- (24) 田中さんはいい汗をかいてしまったのでお家に帰ってからビール  
や、えー、ご飯、おやつなどをいっぱい食べて、(J30)
- (25) でも、走っても疲れたら水分補給をしなくてはいけません。でも  
その水分補給に、いつも必ずビールをたくさん飲んでしまいます。  
(J1)
- (26) 走ったりして疲れた、えっと、体をビールとかで結局(飲んだり  
して)しまったりして癒していると、(J29)

近年熱中症対策として、運動時の十分な水分補給の必要性が世間で言われているが、(23)(24)(25)は「喉が渴いた」と説明するのではなく、発汗後の水分補給という観点で理由を説明している。また、(26)は1990年代後半に流行語となり<sup>8)</sup>、その後よく耳にするようになった「癒し(癒す)」という言葉を使用している。

以上のように、日本語母語話者の発話には男性の性格や心理を説明したり、社会で話題になっている事などを織り込んだりし、ストーリーに工夫を凝らしている例が上級学習者より多く見られる。

#### 4) 繰り返し

上級学習者の発話では、以下のように語や表現が繰り返し使用されている例が多い。

- (27) ある日お母さんはお父さんのはらがだんだん膨らんでくるのを見て、お父さんに、えと「ちょっとあなたお腹が出てるんですけど、ちょっとダイエットしたほうがいいですよ」って言いました。たとえば、えー、またお母さんは言いました。「毎朝1時間でも、

ジョギングとかして、健康にもいいですよ」って、言ったんです。で、次の日から、お父さんは、がんばって、ジョギングを始めました。でも逆にえっとジョギングが終わって、うーん、お、ジョギングが終わって、ジョギングが終わって、疲れて、喉とか渴いて、またビールとか飲み始めたんです。それを見てお母さんは、おこってやめなさいって言われたけど、お父さんは、えと、きかずに、マイペースで、えっとずっとのみつづいていきました。で、一ヶ月後で、お父さんは、えっと、ぎゃ、やせ、やせ、てるわけじゃなくて、ぎゃくに太ってきて、えっと、もともとの、ズボンとかも、はけなくなってきたんです。それを見て、お母さんは、うーん、ジョギン、お父さんにジョギングをやめたほうがいいと思ったんです。(F6)

- (28) えー、これは、えー、あるダイエットに関するマンガ、そしてこのマンガは4つの絵に分かれてかいています。え、そしてその1番目は、えー、そのある夫婦が、その奥さんが、夫が太りすぎて、こまっている顔をして、「ダイエットしなさい、ジョギングでもしてダイエットしてほしい」っていって、で、2番目はその旦那さんが、その一生懸命、うーん町で、ジョギングして、一生懸命汗、汗たくさん出て、一生懸命走っている絵で、で、3番目は、そのたくさん運動したから、その旦那さんがすごく太ってるけど、すごくたくさん運動したから、すごくお腹すいてるから、家に帰ったら、すぐビールとかサンドイッチとかたくさん、食べ始めて、で、食べてるときに、奥さんが、そのいそいで、すごく・・なにしてるのあなたみたいな顔をして、で、急いで部屋に入ってきて、で、4番目はその旦那さんがそのまだ運動した後に、たくさん食べたから、食べ過ぎて、まだ前よりもっともっと太って、で、奥さんが横にすごく困っている顔をしているって



うマンガです。(F12)

(27)は「ある日お母さんは～のを見て」で始まり、その後「それを見てお母さんは」が2回登場する。(28)は同じ副詞を何度も使用している例で、「一生懸命」が3回、「すごく」「たくさん」が5回ずつ登場する。これ以外にF1の発話には「とても～ています」が3回、F3には「このまま行ったら～じゃないの」が2回、F7には「これを見て奥さんが」が2回、「これを聞いてお父さんも」が1回、F13には「それを見て奥さんは」が2回使用されている。発話の中には何度も現れる必要のある語や表現がある。たとえば、助詞などの機能語や漫画に何度も登場する人物や物の名前、「結束性」を高めるための手段としての同語の反復などがそうである。しかし、ここで取り上げている語や表現はそれらとは違い、繰り返す必要がないものである。実際、日本語母語話者の発話にはこのような繰り返しの例は見られない。今回の調査は口頭で行われ、文章を書く場合と違って時間をかけてよりよい表現を選ぶことができなかった。そのために、上級学習者は使い慣れた語や表現を繰り返し使ってしまったのではないかと推測される。

以上、明らかになった日本語母語話者の語彙・表現の特徴を要約すると、次のようになる。日本語母語話者は

漫画に描かれている物事をより詳しく表現する

漫画にはない情報を新たに加え、工夫する

同じ表現を必要以上に繰り返し使わない

このように日本語母語話者は2.2で述べた「情報性」という点で上級学習者より優れている場合が多い。

#### 4.2.2 接続表現

次に接続表現に関する日本語母語話者と上級学習者の違いについて考察する。今回の調査では4コマ漫画を使用した。その各コマ、つまり各場面がどのような形式で接続されているかについて検討してみたい。

表 1 は接続表現を「接続詞」「接続助詞」「その他」に分け、日本語母語話者と上級学習者の使用率を比較したものである<sup>9)</sup>。

表 1 日本語母語話者と上級学習者の接続形式

	場面 1 + 場面 2		場面 2 + 場面 3		場面 3 + 場面 4	
	母語話者	学習者	母語話者	学習者	母語話者	学習者
接続詞	11例 (31%)	5例 (36%)	19例 (54%)	9例 (64%)	6例 (16%)	4例 (29%)
接続助詞	17例 (47%)	6例 (43%)	10例 (29%)	1例 (7%)	28例 (76%)	4例 (29%)
その他	8例 (22%)	3例 (21%)	6例 (17%)	4例 (29%)	3例 (8%)	6例 (43%)
計	36例	14例	35例	14例	37例	14例

接続詞の中には「それで」「そして」「で」「しかし」「ところで」などが含まれ、接続助詞の中には「て」「で」「ので」「が」「ものの」「たら」、そして連用中止形が含まれる。「～て、で」のように接続助詞と接続詞の両方を使用する例は接続詞にも接続助詞にも含めることにした。「その他」の中には、副詞、指示表現、先行語の同語や関連語句（類義語、対義語、上・下位語など）の使用によって接続する例が含まれる。

まず、場面 1 と 2 の接続部から見てみよう。数値を比べると、日本語母語話者も上級学習者も大きな差は見られない。日本語母語話者が一番よく使用している接続表現は接続助詞「て」(8例)と接続詞「で」(8例)で、次いで接続助詞「ので」(6例)であった。上級学習者のほうも接続助詞「て」(5例)が一番多く、次に接続詞「で」(2例)が多かった。「その他」に関しては、日本人母語話者では「(男性名)さんは～。(男性名)さんは～」と前文の主語を繰り返す例(3例)、「～。ということ」(2例)、「～。注意されてやせようと」(1例)など、上級学習者では「二日の日の朝」「翌日の朝」(各1例)、「ある日、妻は夫に～。夫

も～」(1例)が見られた。

場面2と3の接続部では、日本語母語話者も上級学習者も接続詞を使用している例が最も多く、どちらも逆接の接続詞が主に使用されている。次に多いのは日本語母語話者では接続助詞、上級学習者では「その他」であった。日本語母語話者の接続助詞10例は全て「が」「けど」などの逆接の接続助詞であったが、上級学習者では逆接の接続助詞は全く使用されておらず、接続助詞は「て」の1例のみであった。上級学習者で二番目に多かった「その他」を詳しく見てみると、(29)(30)のような例が4例あった。

(29) いろんなトレーニング始めました。トレーニングして終わってから、(F4)

(30) 一生懸命走りに出かけました。昼間は家に帰った時に、(F13)

(29)(30)は先行語の同語や対義語と「(て)から」「時」の時間を表わす助詞や名詞で構成された語句が使用されている。日本語母語話者の発話にもこのような先行語の同語や関連語句を使用する例が5例見られた。そのうちの3例は(29)(30)と同様に時間を表わす助詞や名詞と共に使用した例であった。しかし、他の2例は次の(31)(32)のように先行語の同語と逆接を表す助詞「が」「のに」を使用した例であった。

(31) 注意されてやせようと田中さんは毎朝ジョギングを始めました。ジョギングを始めたのはいいですが、(J14)

(32) 田中さんは最近太ってしまったので、奥さんに、えっと、「ランニングでもしたら」って言われたので、ランニングすることにしました。ランニングしたのに、(J32)

また、日本語母語話者の中には「1、2、1、2・・・」とジョギングの掛け声で男性がジョギングをしている場面2を表現し、「ああ、いい汗かいた。」というせりふで男性がジョギングを終え、場面3に移行したことを聞き手に理解させるという例もあった。

場面3と4の接続部で最もよく使用されているのは、日本語母語話者では接続助詞で、上級学習者では「その他」であった。上級学習者の「その他」には副詞「さらに」「結局」を使用した例（各1例）、「一週間後」のような連語（1例）、また「その/この結果」（2例）「その後」（1例）のような指示詞を含む連語が見られた。

このように見ていくと、場面1と2の接続部における「接続詞」「接続助詞」「その他」の使用率の点、場面2と3の接続部における先行語の同語や関連語句の使用によって「結束性」を維持しているという点では上級学習者は日本語母語話者に非常に近づいているようである。しかしながら、次のような点で上級学習者は日本語母語話者と異なっている。

まず、逆接の場面接続についてである。日本語母語話者は接続詞、接続助詞そして(32)「ランニングしたのに」のような先行語の同語と接続助詞で構成される接続語句で逆接を表している。ところが、上級学習者は接続詞しか使用していない。上級学習者は逆接の場面接続における接続詞以外の表現が十分に習得できていないと考えられる。

次に、場面3と4の接続部で、上級学習者では29%（4例）しか接続助詞を使用していないのに対し、日本語母語話者では76%（28例）が接続助詞を使用しているという違いが観察された。日本語母語話者の接続助詞の例をさらに詳しく見てみると、それらの例が「結局」（17例）「結果的に」（1例）「拳句の果てに」（1例）「最終的に」（1例）「余計に」（5例）「逆に」（2例）と共起していることが分かる。これより、場面3と4の接続部では多くの日本語母語話者が結果や結論を導く「結局」、ある条件下で予想外に結果の程度が高まる様子を表す「余計に」、物事の

方向性が反対であることを表す「逆に」などの副詞を選出したため、接続助詞による接続が多くなったのではないかと推測できる。上級学習者の発話の中にも「結局」の使用例が4例あり、副詞を接続表現として使用している例は見られるが、日本語母語話者に比べるとその使用率は低い。増田（2000）は日本語母語話者と学習者が書いたストーリーテリング文を分析し、日本語母語話者は「実は・・・たのだった」「結局・・・た」などの特定の言語表現形式で因果関係を表わす傾向があると指摘し、またそのような特定の言語表現形式を学習者が誤りなく使用するの難しいと述べている。今回の調査は筆記ではなく口頭で行われたが、やはり口頭でも同様の結果が出たということになる。

最後に、先行語の同語や関連語句の使用と同様に「結束性」を維持するために重要な役割を果たす指示表現の使用についても見ておきたい。日本語母語話者は場面接続部において、指示表現を全く使用していないが、上級学習者は場面3と4の接続部において「その後」「その結果」「この結果」を使用している。

場面接続部だけではなく、文間の接続も含めて用例を見てみよう。(33)は日本語母語話者の、(34)(35)は上級学習者の例である。

(33) 田中さんはまず、田中さんはダイエットに毎朝走っていました。

それを応援していた奥さんも「なかなかやるな」「自分の夫はなかなかやるな」と少し感心していました。(J34)

(34) ふつう男の人は4代になると、一つの問題が出てきます。それは、体重がだんだん増えてきて、特にお腹はまるくなくなってしまうということです。(F5)

(35) しかし、ジョギングが、あ、次の日ジョギングが終わる、終わってから、まもなくつかれきった夫は再びおもいきり飲食し始めたのである。そんな状況を何日も繰り返して、結局夫は前より一

層太くなりました。(F8)

文間の接続も含めた指示表現の用例数は、日本語母語話者35名の発話には3例しか見られなかったのに対し、上級学習者13名の発話には15例も見られた。また、先行研究では学習者の発話の問題点としてア系の指示表現の誤用が指摘されているが<sup>10)</sup>、今回はそのような誤用は見られなかった。これらの結果は今回の学習者が日本語母語話者のレベルに一步近づいていることを表しているようにも思える。しかし、上級学習者の用例には4.2.1で述べたような「それを見て～さんは」を必要以上に繰り返す例も含まれているので、必ずしも上級学習者全員が指示表現を有効に使っているとは言えない。

#### 4.2.3 視点

本節では視点に関して、日本語母語話者と上級学習者の発話を比較する。以下「視点」「焦点」「登場人物との距離」の3つの観点から、発話のタイプを分けた。話し手が誰の立場で説明をしているのかを「視点」、話し手が誰のことを述べているのかを「焦点」とする。最後に、話し手が語り手として傍観者のように事象を述べているのか、それとも話し手自身が登場人物の立場で、あるいは登場人物を知っている者として説明しているのかを「登場人物との距離」とする。

1) 視点

視点固定

- ・ 一方固定

登場人物の中の一人の立場から見る（受身、使役、授受補助動詞の使用あり）

- ・ 中立固定

遠くから離れた立場で見る（受身、使役、授受補助動詞は使わない）

視点移動

離れた立場で見たり、登場人物の立場で見たりする

2) 焦点

- ・ 移動（主語の明示、接続詞など移動がわかるようなマーカが必要）

- ・ 一点（男性だけ、または女性だけのことを述べる）

3) 登場人物との距離

- ・ 傍観（語り手として述べ、絵の中の登場人物と非関与）

- ・ 参加（登場人物の一人として絵の中の登場人物と関与）

以上の3つの観点から日本語母語話者のストーリーテリングのタイプは以下のA～Gの7つに分類できる。（数字は発話した人数）

A 視点一方固定・焦点移動・傍観型 （21名）

B 視点一方固定・焦点一点・傍観型 （1名）

C 視点中立固定・焦点移動・傍観型 （9名）

D 視点移動 ・焦点移動・傍観型 （1名）

E 視点一方固定・焦点移動・参加型 （1名）

F 視点一方固定・焦点一点・参加型 （1名）

G 視点中立固定・焦点移動・参加型 （1名）

上級学習者は以下の3つのタイプに分かれた。

- A 視点一方固定・焦点移動・傍観型 (1名)
- C 視点中立固定・焦点移動・傍観型 (8名)
- D 視点移動 ・焦点移動・傍観型 (4名)

はじめに日本語母語話者について考察する。

#### A 視点一方固定・焦点移動・傍観型

日本語母語話者が一番よく使ったタイプである。視点を一方に固定して事実を述べる。すべての発話は男性の視点に固定するものばかりで、女性に視点を置いたものはなかった。4コマの絵を見ると、明らかに男性が主人公であるとわかるので、話の視点を主人公に置くのは自然であると思われる。

#### B 視点一方固定・焦点一点・傍観型

- (36) えー、田中さんは最近太ってきてダイエットしようとして運動したんですが、そのあとに食べ過ぎてよけいに、太ってしまいました。(J21)

主人公である「田中さん」にだけ焦点をあてている。しかし女性も4コマすべての場面に登場し田中さんと関わっているのに、一切言及していない。視点は固定され安定しているとはいえ、「情報性」に乏しく、聞き手にとっては、何も引き込まれるような内容にはなっていない。いくら「結束性」があっても「情報性」が低いと話として聞き手にとっては退屈さの原因となる。



C 視点中立固定・焦点移動・傍観型

(37) ビールが大好きな田中さんという方がいました。その田中さんは自分が少し太っていることをコンプレックスにしている、それで、ある日ダイエットをすることに決めました。田中さんはまず、田中さんはダイエットに、毎朝走っていました。それを応援していた奥さんも「なかなかやるな」「自分の夫はなかなかやるな」と少し感心していました。しかし田中さんはランニングしたあと自分の大好きなビールを何本も飲み、最終的にもとより太ってしまいました。(J34)

日本語母語話者の25%がCの「視点中立固定・焦点移動・傍観型」を使っている。話し手は、物語のナレーターのような中立の立場で話を展開している。

D 視点移動・焦点移動・傍観型

(38) 最近太ったし、前みたいにジョギングしたらやせれるよって言って、って、走らはっ、・・・走ったものの走り終わって早速ビールを飲んで、結局やせれずまた太ってしまった。(J11)

発話の中に全く主語が出てこない。しかも一文であるから、聞き手は一人の人物について述べていると推測しながら聞くであろう。聞き手は「ある人が太ったので、以前したように、ジョギングをしたら、やせられると(自分で)言って、走ったけれど、走り終わってすぐビールを飲んでしまったので、結局やせられなくて、またもっと太ってしまった」と理解してしまう。「やせれるよって言った」のは絵から見ても女性で

あるから、話の焦点が移動しているはずである。それにもかかわらず焦点が移動していることを明示するような言葉が見あたらないので、聞き手は話し手の意図や話の内容を誤って理解することになりかねない。つまり、主語が明示されていないため、不安定な話の展開になっているといえる。

焦点の移動をはっきりさせるために、以下のように訂正するとよい。

(39) 最近太ったし、前みたいにジョギングしたらやせれるよって、奥さんが(田中さんに)言ったので、田中さんは走ったものの・・

動作主を明らかにすることと、何が原因で走ったのかを接続助詞「ので」で結ぶことによって誤解されにくくなる。接続助詞「ので」で男性の行動の原因が女性の行動であることを表している。こうすることによって、男性と女性の行動を中立の立場で述べるCのタイプになる。話し手は登場人物に対して等距離で、しかも話し手の立場で見ているので、視点は固定され、安定している。

さらに視点を一方に固定した次のようなAタイプの表現が可能である。

(40) (田中さんは) 最近太ったし、前みたいにジョギングしたらやせれるよって、奥さんに言われて、走ったものの・・

視点を男性に置き、男性の立場から女性の行動を描写している。受身を使用し一文の主語を男性一人にすることによって、ナレーターのように話すより、「男性寄り」の立場で話すほうが、「結束性」が増す。DタイプよりCタイプ、CタイプよりAタイプが推奨される。

E 視点一方固定・焦点移動・参加型

- (41) 最近、私の隣の家に住んでる田中さんっていう人の・・・  
が・・・なんか、最近旦那さんがお腹が出てきてちょっと太って  
きて、すごく奥さんが困ってるみたいなんですよ。それで、奥さ  
んがランニングをしたら・・・そろそろ運動でもして、そのお腹  
をどうかしたら？って言ってるんですけど、なかなかやってくれ  
なくて全然ダイエットもしてくれなかつたんですけど、この前の  
日曜日に田中さんが、ジャージを着てランニングしてるのを、私、  
見たんですよ。で・・・で、後で奥さんに「旦那さん、走ってま  
したねえ」って聞いてみたら、でも、なんか、やっとジョギング  
してくれたは、いいけど家に帰って来たら早速ビールを飲んで、  
いつもは一本なのに、この前はジョギングから帰ってきてビール  
を三本も空けて、で、拳句の果てには、その前まで入っていたズ  
ボンもはけなくなってしまったそうです。(J6)

話の開始と終結が提示され、分かりやすい。聞き手が初めて、この話  
を聞くと想定し「田中さんっていう人」と導入している。しかも「田中  
さん」は「私の隣の家に住んでいる」と紹介しているので、話し手は事  
柄が起こったその場面にいることが伝わる。話し手は「(私は)田中さん  
を見た」「(私は)奥さんに聞いてみた」と述べ、「みたいだ」「そうだ  
(伝聞)」「んです」を使用して話し手の立場や判断を述べている。終助詞  
「よ」は、聞き手の知らないことに注意を向けさせる機能があり、聞き手  
の関心を引く工夫をしている。

上掲(41)の「なかなかやってくれなくて全然ダイエットもしてくれ  
なかつたんですけど・・・」において、授受補助動詞「～てくれる」の  
使用は、話し手が「奥さん」の視点から「田中さん」を見ていることを

表す。話し手は「奥さん」とは話すが「田中さん」とは直接関わりがないと推察できる。「奥さん寄り」の立場をとっている。

#### F 視点一方固定・焦点一点・参加型

(42) 昨日田中さんにちょっと最近太ったんじゃないかなあーって言ってランニングすることを勧めてみたら田中さんすごく張り切っていて、いっぱい、いっぱい走ってたんだけど、走った後疲れたらしくって、最後ビールをガブガブガブガブ飲んで、疲れたらしく、ご飯もたくさんたくさん食べて、結局前以上に太ってしまって、本当に意味なかったなあって思った。(J10)

話し手は絵の中の女性自身の立場に立って話している。そして登場人物の「田中さん」にランニングを勧めている。「田中さん」が走ったあと飲んだり食べたりして、太ってしまった結果について感想を述べている。話し手は直接田中さんの様子を知ることができる立場であるので、聞き手には話の内容が生き生きと伝わってくる。最後の「本当に意味なかったなあって思った。」と終助詞「なあ」と「と思った」を使い、聞き手に感想を積極的に伝えようとする意図がみられる<sup>11)</sup>。聞き手を意識し、コミュニケーションを成立させたい態度が示されている。

#### G 視点中立固定・焦点移動・参加型

(43) 田中さんっていう45ぐらいの男の人がいてんけど、その人、なんか昔はめっちゃ痩せてて、すごいカッコいいって言ってて、奥さんの方が惚れて結婚したらしいにゃけど、やっぱ40すぎてどどんお腹出てきて、太って中年太りで、奥さんもそれ見て「あなた、

やせたら？」って感じに言ったら旦那さんもやさしいから「ウン、そうだね」ということで、次の日から早朝マラソンを始めてんやけど、まあ、最初は頑張ってたらしいんやけど、それでマラソンをしているってことで安心感を得たらしくって、夜とかも、夜のビールが一本から二本になり、頑張るごとに増えたらしくて、まあ、奥さんも「まあ、いいかな、がんばってはるし、いいかな」って思って、あんまり必死に止めへんかったやけど、それがどんどん悪化して、もう逆効果になってしまって、もう前の段階より太ったみたいで、奥さん悩んではったわぁ (J26)

話の開始と終結があり、まとまりがある。話し手は登場人物の近くの人という立場で話している。聞き手が「田中さん」を知らないことを想定し「田中さん」という形を使って話を開始していない。かわりに、「田中さんっていう・・・」を使い、聞き手が「田中さん」を知らないとして、適切な表現を選び、話を自然なものにしている。また「～男の人がいてんけど・・・」「結婚したらしいにやけど・・・」「始めてんやけど・・・」のように「のだ」の関西方言「にゃ」「んや」を使い、聞き手に対して説明をしている態度を表している。聞き手を意識している箇所は最後の終助詞「わぁ」にも見られ、詠嘆の気持ちを相手に伝えて話し手の気持ちを聞き手に強く伝えようとしている。助動詞「らしい」が4回出てくる。仁田(2000)は「らしい」は「ようだ」「みたいだ」とともに徴候性判断を表す形式であるとしている。ある状況が現に存在しており、その状況から引き出されたものとして、命題内容である事態の成立・存在を把握していることを表す。判断を導く状況を見たり、聞いたりしているのである。

(44) 昔はめっちゃ痩せてて、すごいかっこいいって言ってて、奥さん

の方が惚れて結婚したらしい。(J26)

話し手は奥さんから話を聞いて、判断している。「昔はめっちゃ痩せて、すごいかっこよかった」ことを根拠に「奥さんの方が惚れて結婚した」と奥さんから聞き、それを証拠として判断している。「らしい」を使って聞き伝えたことを述べている。

(45) 最初は頑張ってたらしいんやけど、それでマラソンをしているってことで安心感を得たらしくって、夜とかも、夜のビールが一本から二本になり、頑張るごとに増えたらしくて・・・。(J26)

(44) と同様に「田中さん」の様子を「奥さん」から聞いて、それを情報源として事態を捉えている。「らしい」の使用によって、話し手は「奥さん」と直接関わっていることが分かる。また助動詞「みたい」も一回使用している。

(46) もう前の段階より太ったみたいで、奥さん悩んではったわぁ。  
(J26)

「みたいだ」は「らしい」よりも弱い根拠による主観的で感覚的な推量で「ようだ」の会話的表現である。仁田(2000)は「みたいだ」は「事態から生じる一つの表れを直接観察することによって、事態の成立を捉えたものである」としている。話し手が実際見たことや体験したことを証拠として話し手が判断していることを表す。(46)では、話し手は直接「田中さん」を見て、あるいは会って「以前より太った」と判断したといえる。話し手は以上のことから登場人物である「田中さん」も「奥さん」も見た、あるいは会って話したことがあると分かる。登場人物と話し手

の距離は傍観型のストーリーテリングのタイプより近く、聞き手は話を身近なものとして聞くことが出来る。話し手が聞き手に命題内容について断言を避け、あいまいに言うことで、聞き手への配慮を示していると考えられる。つまり聞き手に対する間接的、婉曲の表現であり、聞き手を意識しているからこそ使用したといえる。

以上日本語母語話者のストーリーテリングの7つのタイプを概観した。次に上級学習者のストーリーテリングを分析する。上級学習者のストーリーテリングのタイプはA,C,Dの3つであった。

#### A 視点一方固定・焦点移動・傍観型

焦点は登場人物の双方にあるが、視点が男性側から常に述べられているので、聞き手は分かりやすい。また男性の視点から述べられているので、聞き手は男性の立場に近づき、より心情等が伝わりやすく、話の中に入りやすい。上級学習者ではこのタイプを使ったのは一人だけであった。(47)では「奥さんにすすめられて」と受身を使用して「田中さん」寄りの視点に立っている。

(47) 最近だんだん太った田中さん、は、奥さんにすすめられて、あの、毎朝、運動するようになりました。しかし、夜会社から帰宅して、で、ご飯を食べながら、ビールを飲む田中さんは、ダイエットできずに、だんだん太りました。結局、前の服は全部着ることができなくなりました。(F11)

C 視点中立固定・焦点移動・傍観型

話し手は出来事が起こった場面から離れたところにおり、かつ話し手から二人の登場人物は等距離である。つまり二人の行動を中立の立場で述べているのである。

視点は中立なので聞き手として違和感がないが、出来事が淡々と述べられていて、引き込まれるようなことはない。焦点が移動するので、それを明確にするために動作主を明言化したり、指示詞や接続表現を用いたりして話の展開を明らかにする必要がある。受身・授受補助動詞・使役の使用はみられない。

話し手の立場をしめす表現はF5とF7の2名だけが使用していた。

- (48) ところが、ジョギングから帰ってきたお父さんは、お母さん用意したおいしそうな朝ごはんを見ると、すぐに座って、あ、ごちそうに楽しみ始めまし、始めました。サンドイッチ、すしなどではなく、ビールも三本、三本を飲んでしまいました。一番大きいズボンでもなかなかはけなかったです。ああ、ど、どうしよう。二人はまたこま、こま、悩みに、悩みに入り込んでしまいました。(F5)

とりたて助詞「も」と助動詞「～てしまう」を使用して、飲んだ量の多さを後悔の気持ちを持って述べている。「～でも、なかなか・・・できなかった」と極端な例を挙げて残念さを表している。最後に「～てしまう」で終わり、話が期待はずれで、残念な結果に終わったことを表現している。

- (49) 食事のほうめん、ところでは、ぜんぜん、何のせいやくもしてなくて、してなかったんです。(F7)



説明の表現「んです」を使い、一つの段落が終わったことを示している。これによりまとまりのある構成になり、「結束性」が維持できる。

#### D 視点移動・焦点移動・傍観型

話し手から二人の登場人物は離れているが、1つの視点から事柄を述べる態度が見られない。ある時は話し手からの直接的な立場から、またある時は登場人物の立場から述べられ、視点が固定しない。聞き手は視点の移動に気づくまでに時間がかかり、しかも期待している展開にならないので、聞いた事柄を修正しなければならなかったり、何が言いたかったのか分からなくなってしまったりする場合がある。正しく理解するのが困難になる。

(50) お母さんがすぐ、きょうのところに入って、あなた、だめだよ。  
この、こうすると、だめじゃないの。このまま行ったらもう無駄  
じゃないの、って言われて、まあ、結局はお父さんのほうはやせることができなく、逆に太り始まった。(F3)

焦点は「お母さん」から「お父さん」に移動している。聞き手は、はじめ「お母さん」に焦点をあてて聞いている。すると途中で何のマーカ―もなく「言われて…」と「お父さん」に焦点をあてた文に変わる。「まあ、結局、お父さんの方は・・・」と「お父さん」に焦点をあてている表現「・・・の方は」が後にあっても「言われて」が「お父さん」のことと聞き手にはすぐ認識しにくい。「言われて」を「言って」とすると、視点が固定する。

以下(51)～(53)も、視点が固定していなので、不自然になった発話例である。

- (51) ビールを飲もうと、したとき、妻がだめだめと言われてけど、結局三本も飲んでしまいました。(F5)
- (52) それを見てお母さんは、おこってやめなさいって言われたけど、お父さんは、えと、聞かずに、マイペースで、えっとずっと飲みつづいていきました。(F6)
- (53) ある日、リーさんの奥さんは、リーさん、太っているリーさんを太っていると健康によくないと言われて、あの、ダイエットを始めた。(F10)

以上のような不自然な文を表出する原因として、上級学習者は話の中で、主語を明確にしない、受身の適切な使い方が分からない、受身での適切な助詞の選択が出来ない、などの問題点が見受けられる。

以上、上級学習者のストーリーテリングのタイプは3つであった。

すべての発話のタイプを3つの観点からまとめると、表2のような結果となった。視点一方固定型で話されると、聞き手は内容が理解できる。しかしBタイプのように登場人物の情報が少ない場合は、構成は間違っていないが内容に乏しく、問題が残る。

視点中立固定型では、現場に関与していない傍観型は、ナレーターのように事実を述べるだけになる。話し手の主観が述べられれば、動きのある表現が期待できる。つまり視点中立固定であっても参加型は、話し手の事実に対する主観が表されており、聞き手は話の内容に引きつけられる。談話の「意図性」だけでなく「容認性」<sup>12)</sup>も高まりコミュニケーションが成り立ちやすくなる。

視点移動は焦点移動・傍観型にのみ見られた。「結束性」に欠け、意味が正しく伝えられない。産出された発話でも、談話として成り立ち、しかもコミュニケーションが日本語母語話者に近い形で行われるには、表2のA,F,Gのタイプが有効であり、Eタイプが一番談話として魅力のある

ものになるということがわかる。表中の記号×・ ・ ・ は発話がどれだけまとまりがあり、日本語母語話者に近い自然なものなのかを图示したものである。

×は、誤解を招くタイプで、 が一番推奨されるタイプである。 は情報性に乏しく、内容が貧弱なタイプであり、 はコミュニケーション上問題はないが、さらに「情報性」や「意図性」を加えることによってより豊かに内容が伝えられる可能性をもっている。

表2 発話のタイプ

焦点(登場人物)	傍観型		参加型	
	移動(2人)	一点(1人)	移動(3人)	一点(2人)
視点固定 一方	A	B	E	F
中立	C		G	
視点移動	D ×			

上級学習者の発話はすべて傍観型で登場人物が二人のタイプに限定されている。一方日本語母語話者の発話は7つのタイプにわたって産出した。結果は以下表3・表4に示す。

表3 上級学習者の発話のタイプ(13名)

焦点(登場人物)	傍観型		参加型	
	移動(2人)	一点(1人)	移動(3人)	一点(2人)
視点固定 一方	A 1名(7.7%)	B なし	E なし	F なし
中立	C 8名(61.5%)		G なし	
視点移動	D 4名(30.8%)			

表4 日本語母語話者の発話のタイプ(35名)

焦点(登場人物)	傍観型		参加型	
	移動(2人)	一点(1人)	移動(3人)	一点(2人)
視点固定 一方	A 21名(60%)	B 1名(2.86%)	E 1名(2.86%)	F 1名(2.86%)
中立	C 9名(25.7%)		G 1名(2.86%)	
視点移動	D 1名(2.86%)			

## 5. 結論

本研究は日本語母語話者と上級学習者にストーリーテリングを課し、その発話を比較することによって、上級学習者の口頭伝達能力に関わる問題点を検討した。

まず、上級までに学習してきた項目のうち、自動詞・他動詞・可能動詞、文脈にあった適当な語の選択、受身・使役、文体などで問題があり、授業で復習を要する項目であることが明らかになった。

次に、テキストの「情報性」「結束性」「意図性」に大きく関わる語彙・表現、接続表現、視点の3つの観点から、上級学習者の発話と日本語母語話者の発話を比較した。明らかになったのは、以下の点である。

1. 日本語母語話者は漫画に書かれている物事をより詳しく表現したり、漫画にない情報を新たに加えたりすることで、「情報性」を高めているが、上級学習者はこの点で日本語母語話者に及ばない。また、上級学習者は使い慣れた語や表現を必要以上に繰り返し使用する傾向がある。
2. 日本語母語話者は接続詞、接続助詞、指示表現、副詞、先行語の同語・関連語句など多様な接続表現の中から最も適当なものを選択し、「結束性」を維持することができる。しかし、上級学習者は

これらの接続表現が有効に使用できない。特に逆接の場面接続における接続詞以外の接続表現に関して問題がある。

3. 日本語母語話者のストーリーテリングのタイプは以下の7つに分類される。

- A 視点一方固定・焦点移動・傍観型
- B 視点一方固定・焦点一点・傍観型
- C 視点中立固定・焦点移動・傍観型
- D 視点移動 ・焦点移動・傍観型
- E 視点一方固定・焦点移動・参加型
- F 視点一方固定・焦点一点・参加型
- G 視点中立固定・焦点移動・参加型

このうち、日本語母語話者が一番よく使用したタイプはAであった。一方、上級学習者の発話にも見られたタイプはA,C,Dで、そのうち一番よく使用されたタイプはCであった。上級学習者の発話は日本語母語話者と異なり、視点が定まらなかったり、話し手の態度が示されていないことが多い。テキストの「結束性」、「意図性」を高めるために、A,E,F,Gの使用が奨励される。

本研究の対象である上級学習者は先行研究で対象となっている中上級学習者に比べ、語彙・表現、接続表現、視点、それぞれの点で日本語母語話者に近づいていることは間違いない。しかし、日本語母語話者にさらに近づくためには、本研究で明らかになった問題点を教師だけでなく上級学習者も認識する必要がある。今後はこれらの問題点をふまえ、実際の授業の中でどのように上級学習者に認識させ、どのように上級学習者の口頭伝達能力を伸ばしていくかが課題となる。

注

1 渡邊（1996）は、類型化する前段階の手続きとして、話し手が登場人物のいずれを話題にしているかという「注視点」に関してまず2つに分類した。一方は、談話の初めから終わりまで、一人の人物の行為に注目しているものを「固定注視点」とし、もう一方を、複数の人物の行為を描写しているものを「移動注視点」とした。つぎに「視座」の観点を加えて3つに分けた。すなわち前述の「固定注視点」をさらに2つに分けた。受身や授受補助動詞の構文を使い「視座」を一人の登場人物寄りになっている「ある人物寄りの視点」と受身や授受補助動詞の構文を持たず登場人物から離れた遠い位置に「視座」を置いた「遠距離一焦点の視点」の2つである。そして、最後の「移動注視点」の場合は「視座」は登場人物に等距離の「中立視点」であるとしている。

## 注

- 1) 松木（1992）も「注視点」「視座」について述べている。
- 2) 注1を参照
- 3) 付属資料1を参照
- 4) Fは日本語学習者、Jは日本語母語話者とする。番号は発話資料の番号で、日本語学習者はF1～F13、日本語母語話者はJ1～J35である。
- 5) 活用上の誤用が少ないことは庄司（2001）でも述べられている。
- 6) 『日本語能力試験 出題基準〔改訂版〕』国際交流基金編著 凡人社 2004年3月25日
- 7) 調査に使用した4コマ漫画の1コマ目、2コマ目、3コマ目、4コマ目をそれぞれ場面1、場面2、場面3、場面4とする。
- 8) 『現代用語の基礎知識』自由国民社 2004年1月1日
- 9) 接続詞、接続助詞は『新明解国語辞典 第4版』の分類に従った。  
『新明解国語辞典 第4版』三省堂1989年12月10日
- 10) 渡邊（1996）は中上級レベルの中国語話者はア系接続表現の誤りが多いと報告している。
- 11) 発話する側の「意図性」がテキストのまとまりに貢献することは、ポウグラント・ドレスラー（1984 池上嘉彦訳）によって言及されている。

12) ポウグランド、ドレスラー (1984) のテキスト性を決める 7 つの基準の中のひとつである。

## 参考文献

- 相原林詞 (1987) 「接続語句と文章の展開」『日本語学』9月号 37-45 明治書院
- 庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『日本語教育指導参考書11 談話の研究と教育』7-42 国立国語研究所
- 和泉絵美・内元清貴・井佐原均 (2004) 「英語スピーキングテストSSTとは何か」『日本人1200人の英語スピーキングコーパス』22-28 アルク
- 井出祥子・櫻井千佳子 (1997) 「視点とモダリティの言語行動」田窪行則編『視点と言語行動』119-153 くらしお出版
- 海野多枝 (2001) 「外国語学部留学生に対する日本語口頭表現の指導をめぐるアクションリサーチに基づくコース設計の事例」『東京外国語大学論集』第62号 79-96
- 岡秀夫 (1994) 「スピーキングとオーラル・コミュニケーション」『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』239-265 大修館書店
- 金子朝子 (2004) 「スピーキング」『第二言語習得研究の現在 これからの外国語教育への視点』161-179 大修館書店
- 庄司恵雄 (2001) 「日本語学習者のストーリー・テリングは語彙選択から見て日本語母語話者とどこが違うか」『群馬大学留学生センター論集1』1-11
- 庄司恵雄ほか (2004) 「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」『日本語教育』122号 42-51
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点」『日本語教育』85号 25-37
- 栃木由香 (1989) 「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析・話の展開と接続形式を中心に」『日本語教育論集』第5号 159-174 筑波大学留学生教育センター
- 中井陽子 (2005) 「談話分析の視点を生かした会話授業 ストーリーテリングの技術指導の実践報告」『日本語教育』126 94-103
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版

- R.de ボウグランド、W . ドレスラー (1984) 『テキスト言語学入門』池上嘉彦 他  
共訳 紀伊國屋書店
- 牧野成一他 (2001) 『ACTFL - OPI入門 日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク
- 増田真理子 (2000) 「日本語学習者と母語話者のストーリーテリング文を比較する  
4コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストの分析から」『多摩留学生センター教育研究論集』第2号 13-25
- 松木正恵 (1992) 『『みること』と文法研究』『日本語学』8月号 57-71 明治書院
- 村野井仁 (2004) 「教室第二言語習得研究と外国語教育」『第二言語習得研究の現在  
これからの外国語教育への視点』103-122 大修館書店
- 森田良行 (1987) 「文の接続と接続語」『日本語学』9月号 28-36 明治書院
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」『モダリティ』81-159 岩波書店
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版

## 付属資料 1



実用英語技能検定 (1993年第二回) 準1級面接カード 日本英語検定協会